

日本伝統音楽学習を通して音楽的感受力を高める授業づくり

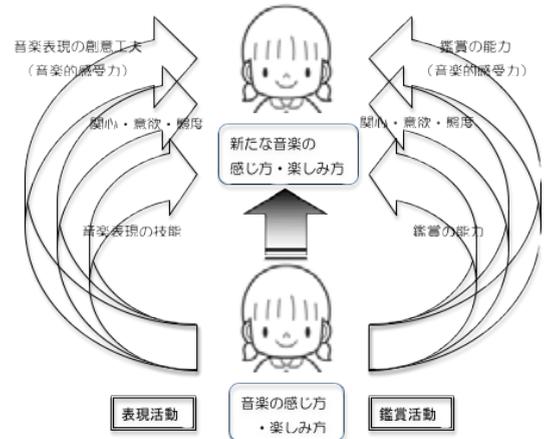
附属平野小学校では、音楽は、それぞれの国の文化や歴史、風土を背景に生まれ発展してきていることから、日本に生活する子どもたちにとって、日本に伝わる音楽（日本伝統音楽）を教材として扱うことは自然なことである、との考えのもと、授業づくりを行っている。

子どもの生活経験に基づき、文化的背景を踏まえ学習活動を設定することで、より子どもたちが豊かに音楽的感受力を発揮することができるようにしている。

音楽的感受力とは・・・

本校音楽科では、めざす子ども像を「**音楽的感受力を豊かに発揮する子ども**」としている。音楽的感受力とは、「**音や音楽を知覚・感受し、音楽のよさや美しさなどについて自分なりに思考・判断する力**」ある。

子どもたちは、新たな音楽に出合った時、これまでの自分の音楽経験を基に考えることを通して、気づいたことや感じたことを、音や言葉で表現する。自らの想いと経験を絡め、思考錯誤を始め、これまでの経験や新たな気づきから、解決の糸口を見つけていく。音に込めた思いや、音から感じたことを言葉にすることで、自分の感じ方や友だちの考え方を共有する。友だちの感じ方への理解を深めようとする中で、新たな感じ方に出会い、自分の感じ方を伝えるために、より音楽を知ろうとする。友だちと一緒に表現していく中でも、「こんな風に表現したい。」「でも、ここは、〇〇だから、私は・・・と思うよ。」というように表現の仕方や工夫の模索していく。このような活動の中で、「音楽的感受力」は育まれる。



日本伝統音楽の教材化

生活経験を踏まえる

子どもたちは、生活の中で、友だちと《かくれんぼ》や《だるまさんがころんだ》などで一緒にわらべうた遊びをしたり、《おちゃらかほい》のお手合わせやケンパ遊びをしたりしている。

このような子どもたちの生活経験の想起をきっかけとし、子どもたちが無意識に音楽に関わっていた部分に目をむけ、スムーズに学習に取り組んでいくことができるようにする。

生活の中にある遊びの音楽を学習に取り入れることは、子どもたちにとって興味・関心を高く持てる学習になると同時に、**指導内容を発達特性を踏まえ、自然な流れで学習するのに有効**であると考えている。



文化的背景を踏まえる

音楽は文化的背景をもって形づくられるため、文化的背景が変わることで音楽の形も変わっていく。音楽を支える文化的背景にも視野を広げていくことで、説得性のある価値づけを行っていくことができるようにしている。

例えば、本校の子どもたちにとって、平野に根付くだんじり囃子を教材として学習する際、子どもたちの経験に問いかける場を導入に設定している。「私の住んでいる地域（生野）にもだんじりがあるよ。」「岸和田のだんじりのニュースをしていたよ。岸和田のだんじりもおはやしに合わせて動いていたよ。」といった生活経験を踏まえた意見交流により、だんじりは地元で根付き、継承されてきたものであることに気づいていく。そこで、どのようにして、だんじり囃子は伝承されてきているのかを伝えることで、子どもたちは自らの学習においても口伝（口唱歌）が取り入れられていることの意味に気づき、だんじり囃子に対する自分なりの価値づけをしていくことができるのである。

創作活動を設定する

現代に生きる子どもたちにとって、日本伝統音楽を体感する機会は少なくなってきている。また、伝統の継承は、ただそのまま形を真似ることではなされるものではない。

そこで、本校では、子どもたちが、**自らの生活経験を踏まえた創作活動を通して**、日本伝統音楽を身近な音楽と感じることができるようにしている。自らの生活経験に照らし合わせ、長い間継承されてきた音楽を捉え直すことで、**自らの価値観をもって音楽を味わい、継承**することができる。自らの価値観に照らし合わせていく中で、しっかりとこれまで伝わってきた音楽のよさに気づき、**新たな日本伝統音楽の在り方を子どもたち自身が模索していく**ことができるようにしている。

